平成２９年度
「モラル・エッセイ」
コンテスト
優秀作品集

福島県教育委員会

平成二十九年度　道徳教育総合支援事業

「モラル・エッセイ」コンテスト優秀作品

【　中学生の部　】

最優秀賞	「家族の一員として」	白河市立表郷中学校	二年	鈴木　渚	さん
優秀賞	「日本人としてよさと誇り」	会津若松市立河東中学校	二年	巻　那穂	さん
優秀賞	「僕の生まれた町」	会津若松市立第二中学校	三年	伊藤　要	さん

【　高校生の部　】

最優秀賞	「命の理由」	視覚支援学校高等部	二年	常松　桜	さん
優秀賞	「雨の日の羊羹」	猪苗代高等学校	二年	増子廉大良	さん
優秀賞	「病気が気づかせてくれる絆」	視覚支援学校高等部	二年	遠藤　未来	さん

【　一般の部　】

最優秀賞	「孫とじいじ」	いわき市在住		石井　直人	さん

家族の一員として

白河市立表郷中学校

二年　鈴木　渚

私は、六人家族です。四人兄弟の二女で、姉・兄・妹がいます。妹は生まれつき障害を持っているため、会話をしたり、走ったりすることができません。だから、妹が考えていることを百パーセント理解しようとしてもできないのです。障害を持っている人をどのように見ているかは、人それぞれだと思います。私は同じ人間として、ただ私とは少し違うだけなんだ。そう思っています。

ある日の朝。朝ご飯を食べている時に妹が近づいてきて肩をトントンとしました。私は何だろうと思っていると、父が「どれ、学校行くよ」と妹に言い、妹はそれを聞いて私の手を取りました。「あっ、行って来ますって私に伝えているんだ。話せないから行動で示しているんだ」と分かりました。だから私は、「いってらっしゃい」と笑顔で言ってあげたら、妹はニコッと笑い玄関に向かいました。このような行動は朝だけでなく、夜にもありました。寝るのが早い妹は、私がお風呂に入り、髪の毛を乾かしている時に私の肩を朝のようにトントンとしました。今度は、「おやすみと言いに来たんだ」と思いました。この行動は、私だけでなく母・父・姉にもします。兄は高校で寮生活をしているのでたまにしか会えませんが、会った時は必ず肩を叩き、自分が伝えたいことを行動で示します。時々、何を伝えたいのか分からず反抗してしまう時があります。そんな時は、妹の立場になって考えるようにしています。

私の家族は、とても明るく温かな家族です。相手を思いやる気持ちを教えてくれたのは、父と母でした。人生は一人では生きていけない。本当にその通りだと心から思います。話すことができないのなら、何を伝えようとしているのかを理解してあげることが大切だと思います。これからも家族全員が一つになり幸せを築いていきたいと思います。

日本人としてのよさと誇り

会津若松市立河東中学校

二年　巻　那穂

私は、八年前、父の仕事の都合で北京に住んでいた。その年は北京オリンピックが開かれ、私はマラソンを生で応援する機会を得た。その時の感動は一生忘れられない。なぜなら会津出身のランナー「佐藤敦之」が出場していたからだ。そのことよりも忘れられないのは、彼の走り終えた後の態度である。

私は、その日とてもドキドキしながら、オリンピックスタジアムへ向かった。母は、「佐藤敦之は、メダルがもらえるかもしれない。最近のタイムがとてもいいから」と興奮して話していた。その日は三十度を超える暑さ・・・。北京の夏はとても暑い。乾燥しているので焼け付くような暑さである。

選手がスタートすると、スタジアムの大きなスクリーンに選手の様子が映し出された。初め、佐藤選手は先頭集団にいたが、どんどん遅れていくのが分かった。実況のアナウンスが流れ、棄権の選手が続々出ていることを伝えていた。私は、この暑さの中で、佐藤選手も棄権してしまったのだと思った。

一位のワンジル選手がゴールし、日本人選手の尾形選手や他の選手も続々とゴールしていった。五十人ぐらいがゴールしたとき、突然スクリーンに最後のランナーが映し出された。佐藤選手だった。やっとの足取りだったが、確実にゴールに向かっていた。

佐藤選手がスタジアムに入ってきた。会場が大きな歓声に包まれた。それよりももっと大きな歓声が起こったのは、彼がゴールした時である。彼は、帽子とサングラスをはずし、会場の四方向に深々と礼をしたのだ。最後まで応援してくれた観客に対する感謝の礼だった。私は、日本人として彼をとても誇らしく思った。日本人は礼儀を大切にすると言われている。また、どんなことがあっても最後まで努力する日本人の良さも世界に示したのではないかと思う。私も、日本人としての良さや誇りを大切にし、佐藤選手のように誇られる人になりたい。

僕の生まれた町

会津若松市立第二中学校

三年　伊藤　要

「ただいま」という僕の声が六年半ぶりに家に響いた。家の中の光景は僕の六年半前の記憶を蘇らせてくれた。

僕は、東日本大震災が起こるまで、富岡町に住んでいた。正直、僕に富岡町の記憶はほとんど残っていない。時折、テレビで富岡町の映像を見ることはあるが、それでも僕の記憶が蘇ることはなかった。

今年の夏、僕は六年半ぶりに富岡町に帰ることになった。それを聞いた時は、嬉しい反面、自分自身がどこまで町のことを覚えているのかという不安もあった。国道六号を北上し、富岡町へと入った。街中に入ると、僕の目に懐かしい光景が入ってきた。通学の時に使った歩道橋。商店街の看板。自宅が近付くにつれ、僕の記憶は鮮明になっていった。いよいよ自宅が見えてきた。自宅に着くと、すぐに荒れ果てた庭が目に飛び込んできた。除染によって植木は取り除かれ、ただただ雑草が生い茂っていた。家の中は、六年半前とほとんど変わっていなかったが、家がとても小さく感じた。柱には、六年半前までの自分の身長が記されてあった。お気に入りだった本、よく遊んだおもちゃ。僕は間違いなくここで生活していたんだと実感した。帰り際、柱に今の自分の身長の新しい傷をつけ、自宅を後にした。

最後に、通っていた小学校を回った。掲示板は平成二十三年三月のままだ。そのすぐ近くでは、復興の工事が進んでいた。友人の家があった場所も取り壊され、更地になっていた。復興が進まず荒れ果てた所もあれば、復興が進み、新しく生まれ変わっている所もある。復興が進むことは嬉しいが、町が変わってしまうことの悲しさもある。しかし、僕達は前に進まなければいけない。六年半前に戻ることはできないが、震災のこと、故郷への思いを決して忘れてはいけないと強く思った。震災はまだ終わっていない。大切なのはこれからなんだと改めて心に刻んだ夏となった。

命の理由

福島県立視覚支援学校

二年　常松　桜

私は時々、どうして生まれてきたのか、命の理由を考えることがあります。これを考えている時は、大抵何かで悩んでいる時です。悩むたびに考えますが、わからなくなって、考えることをやめてしまいます。考えてはやめ、考えてはやめ、を繰り返してずっと過ごしてきました。

ある日、「いのちの理由（わけ）」という曲名に目が留まりました。まさに私が知りたかったことでした。歌っていたのはクリス・ハートでした。彼の歌声は、技術的にきれいなだけでなく、どこか温かい気持ちになれる歌声だと思いました。そして、曲を聴き終わったあとは、ほんとうに温かい、やさしい気持ちになりました。

『私が生まれてきた理由（わけ）は　父と母とに出会うため　私が生まれてきた理由は　兄弟たちに出会うため　私が生まれてきた理由は　友達みんなに出会うため・・・』

これを聴いた時、私は、「なんだあ、こんなに簡単なことだったんだ」と素直に思いました。どうして生きているのか、どうして生まれてきたのか、これについて思うことは、人それぞれ違う考えだと思います。

私は白皮症で、見えにくさよりも外見で悩んできました。いわゆるアルビノで、髪の毛、肌、まつ毛、眉毛も真っ白です。小さい頃からじろじろ見られ、外国人かと聞かれるので、小学六年生に上がるとき、黒く髪を染めました。なぜあのとき染めてしまったかと最近後悔しています。「自分を隠さなくてもよいのではないか、自分を否定してきたことになるのでは」と考えるようになりました。

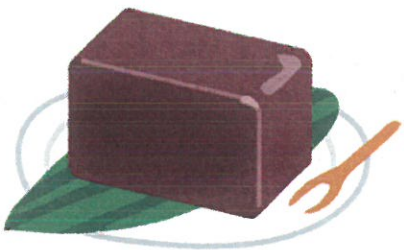
私が生まれてきた理由、それは、たくさんの人と出会って、たくさんのことを経験するため。その中には、辛いことや苦しいこと、うれしいことや楽しいことがあって、そこからたくさんのことを得て、しあわせになるために、生まれてきたのだと思います。

雨の日の羊羹

福島県立猪苗代高等学校
二年　増子　廉大良

私は幼いころ、とてもお婆ちゃん子でした。母親の実家で祖母といっしょにくつろぐのがとても好きで、よく遊びに行っていました。そんな私が小学生だったころ、祖母の家でいつものようにくつろいでいたある日、にわか雨が降ってきました。「予報では晴れだったのにねぇ」と、窓の外を眺めていた私に祖母が言いました。私は、「どうしよう、自転車で帰れなくなっちゃった」と半泣きの状態で祖母にいいました。祖母は少し考えたあと、私にこう言いました。「ちょっとまってなさい。今、良い物を持ってきてあげる」私は、その言葉通り居間に行きました。数分後、祖母がなにやら皿の上に黒いものをのせて持ってきました。「これは羊羹といって、とても甘い和菓子だよ」といってそれを私にさしだしました。続けて祖母は「しかも、ただの羊羹ではないんだ。山の神さまからもらった特別な羊羹で、食べたとたんに雨が止んでしまうんだよ」と言いました。私はその言葉を信じないまま、その羊羹を食べました。羊羹は今まで食べたことのないほど甘く美味でした。するとどうでしょう。いつの間にか雨は止み、雲の間から日差しが差しこんでいたのです。私は祖母に「ありがとう。お婆ちゃんは凄いね」と言って、家に帰りました。

今思うと、あのにわか雨がただの通り雨で、すぐに止むことを知っていた祖母が、私のためについた、優しい優しい嘘だったんだと思います。「私に泣いてほしくない、喜んでほしい」という、祖母の気持ちは、いつまでたっても忘れないように生きていこうと思います。



病気が気づかせてくれる絆

福島県立視覚支援学校

二年　遠藤　未来

私の家族は誰かの病気が治ったら、二、三年で別な誰かが病気になるという繰り返しでした。私は生まれてすぐに、網膜芽細胞腫になり、三歳の時に横紋筋肉腫になりました。ただどちらの病気も懸命な治療と、家族の支えで完治しました。

私が小学一年生の時に全盲の父が悪性リンパ腫になりましたが、発見が早く初期だったのでこれもまた完治しました。

三歳のころの病気から十年もたった私の右足のかかとに腫瘍ができました。かなり強い抗がん剤を使ったため、髪の毛は一回目の治療で全て抜け、貧血もひどく輸血を何回も繰り返し、白血球も下がりました。生ものや作ってから時間のたったものは、一切食べられませんでした。そんな中でも父や母は私の前では、決して泣いたり、弱音を吐いたりせずに、病気になる前と何も変わらない日々を送らせてくれました。そして、両親は私のために毎日のご飯を一から考えてくれて、母も父も私と同じものを食べてくれました。みんなの支えがあり無事手術もして、私の病気は完治しました。

病気になるまでの私は、反抗的な態度ばかりで、母に「中学生なのにこんなこともできないの？ちゃんとやりなさい」と言われる度に（もう、うるさい！いつも私のためって言うけど、ただのやつあたりでしょ？）と思い素直に聞かず、愛情など感じられませんでした。でも、私が重い病気になり、いつも私を励まし、支えてくれたのは、父と母でした。「お前は泣いていいから、不安になってあたってもいい、でも、絶対、今、この病気からにげるなよ」という父の言葉は忘れません。全ての病気が治るわけではなく、失われていく命も少なくはないと思います。だからこそ、伝えたいのです。「どんな病気にも家族みんなで闘って下さい。病気が気づかせてくれる絆もたくさんあります。それがきっと信じられない奇跡を起こします」と。

孫とじいじ

いわき市在住
石井　直人

「じいじ」

私は、五歳の孫からそう呼ばれている。言葉を発するのが、自分の子どもと比べて遅いと思っていたが、今は様々な言葉を口に出すようになった。「じいじ、見て見て」と保育所で描いた絵を見せてくれたり、学習発表会での踊りを見せてくれたり、「じいじ、戦おう」と戦隊もののまねをしたり、変身ポーズをとったりと。

今年の夏休みには早起きして、庭先のプランターのサヤエンドウに水をかけながら「エンドウ豆さん、大きくなってね」と声をかける姿が見られた。孫が味噌汁に入ったサヤエンドウが好きと分かって種を買い、孫と二人で蒔いて育てたものである。

また、保育所の運動会に向けて、かけっこの練習も二人で行った。私が孫を追いかけると「じいじ、転ばないでね」とふり返りながら声をかけてくれる。

時々、お風呂に入って私が孫の体を洗うと、「今度は、僕が、じいじの体を洗ってあげるね」と小さな手で洗ってくれる。

最近、「じいじ、僕は大きくなったらお医者さんになるよ」と言うようになった。私が「どうしてお医者さんになりたいの」と聞くと「病気で困っている人を治したいから」と答えが返ってくる。私はさらに「どうして治したいの」と聞くと「だって助けたいんだもん。もし、じいじが病気になったら僕が治してあげるね」と。

五歳の孫が発する様々な言葉に、私はいつも癒やされる。

これからも五歳の孫に「命の尊さと思いやり」を様々な機会を捉えて話していきたい。

『心優しく素直な孫へ
じいじも頑張るからね』

ふくしまから
はじめよう。

Future From Fukushima.